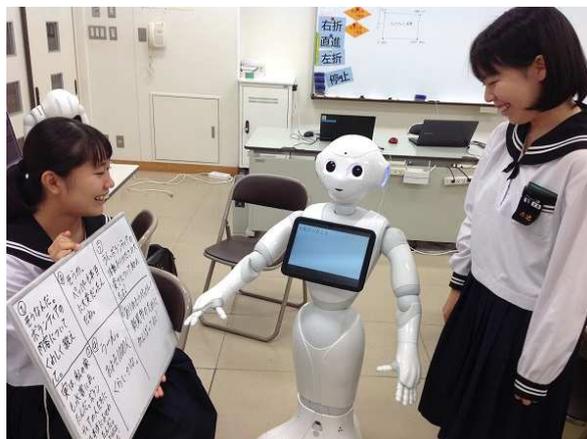


プログラミング教育を振り返って

プログラミング教育もスタートしてはや 2 年半が経過しました。10月15日の公開授業研修会でその成果を発表することができ、子どもたちの晴れやかな表情が印象的でした。今後も継続して取り組むべき教育ですが、一区切りついたこの時期に、今一度振り返りをしてみることにしました。

.....

振り返ってみると、今から約6年前に新見市内中学校を対象として、全生徒と全教員に iPad が貸与され専用のネットワークが構築された。「学びのイノベーション」というキャッチフレーズで、教育の現場に最新の ICT 機器が導入され、学びのスタイルに大きな革新が始まった。さらに 3 年前より、ソフトバンクグループの協力により Pepper と専用機器が貸与されたことで、新見市では ICT 教育と合わせてプログラミング教育が本格的にスタートした。教育機関としてこれだけの恵まれた ICT 環境が整っていることは、現段階においては全国的に見ても珍しい。私たち教育関係者としては、このような環境の中で子どもたちの学びがどのように進んでいくのか、どのように将来を担う子どもたちを育てていくべきなのか、ということ問われる重責を負うこととなった。



私たちは子どもたちに対して、プログラミング教育を通して明確な課題意識と目標をもち、プログラミング的思考やコミュニケーション活動を駆使しながら、解決までのプロセスを大切にしていくことの重要性を伝えてきた。このことは私たち自身にも問われていることで、ほぼ白紙状態のプログラミング教育が、この 3 年間で一定の成果が出てきたことに、あらゆる面で協力していただいた多くの関係者に感謝をするとともに、子どもも大人も学び続けることの重要性を改めて認識することとなった。

プログラミング教育は今後あらゆる教育現場で本格的に実施されることになる。そこでは、先行き不透明な未来を生き抜き、どんな困難に遭遇してもそれを乗り越えようとする「生きる力」が、一人でも多くの子どもたちに身につくことを期待したい。

本校で取り組んできたプログラミング教育は、目指すゴールに対してまだ道半ばである。人的なこと、時間的なこと、技術的なことなど多くの課題が残っており、一つ解決すれば新たな課題が見えてくる。しかしながらこの繰り返しは教育にとっては重要な要素で、終わりのないゴールに向けて常に一つ先を見続けることで、私たちも子どもたちとともに歩んでいきたい。

おわりに

ここ数年の校内研修のようすを振り返ってみると、約 25 名の教師集団が、研修テーマに沿って授業実践を行ったり研修時のグループ討議に熱心に参加したりする姿が定着してきたように思われる。岡山県から出されている「岡山型学習指導のスタンダード」をもとにした授業づくりと、学区内での小学校と中学校で作成した「家庭学習のスタンダード」に沿った自主学習と宿題の設定など、学校と家庭でのまなびの基本的なスタイルは共有することができている。

しかしながら、全国や岡山県の学力・学習状況調査の結果から、特に国語や数学では、学力の中～下位層の割合が全国平均に比べて高く、1 年次から 2・3 年次に学年が上がるにつれて、家庭学習の時間が減る傾向にあり、合わせて、授業への積極的な参加が困難となる生徒の割合が増えてきていることが明らかとなった。このことは、今実践している本校での教育活動のスタイルにもいくつかの改善すべき課題があると考えるのが妥当で、今一度状況分析をする必要が出てきた。

次に示す内容は、校内研修全般を通して感じられた本校の強みと弱みである。

○強み ●弱み

- 教師集団の研修を進める協力体制はできている。
- 学びノートを中心とした家庭学習の指導はできつつある。
- プログラミング学習の教育課程への位置づけと実践はできている、今後も継続した取り組みが可能である。
- 「協働学習」の理論的な有用性の認識が教師集団に乏しく、小グループにした時のまなびが育っていない。
- 自己有用感や自己肯定感の低い生徒の割合が多く、学級内に支持的風土が醸成できていない。
- 授業外での個別指導の時間が設定できておらず、学習内容の定着が不十分な生徒への手立てができていない。

以上のことから、次年度に向けて校内の研修体制を見直し、他地域で一定の成果が見られている理論と実践を参考にして、特に、授業改善で直接的に生きて働く「協働学習」を中心に、「SEL」や「ピア・サポート」のそれぞれの研修部会を設け、校内研修を推進していくことにした。